

わたしの聖戦

女性が働くということ

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

連 215 載

毎朝の新聞

1年くらい前から、朝刊を配達してもらっている。昔だったら、どこの家でも新聞は早朝に配達されるのが当たり前だった。いつの間にか、駅の売店やコンビニで購入することができ、わざわざ家に配達してもらう家は激減した。ある時、授業中に新聞を読んでいるかどうかを学生に聞いてみたところ、家で新聞を取っている学生はひとりもおらず愕然としたことがある。ということ、学生の親にあたる世代も新聞を定期的に読むという習慣は廃れているのだらう。

特にネット社会になって新聞の存在意義は益々薄くなった。若者は、新聞を読んでいなくてもネットのニュースがあれば十分と堂々と口にする。ネットニュースと新聞は違うのだと言いたくても、どう違うのか明確に答える自信がなくて、つい黙ってしまっていた。

朝、決まった時間に新聞を取りに行くひととき。ちゃんと配達されていることへの満足感。雨の日はきちんとビニール袋にくるまれた姿で、間違いない。そこに安んずる感覚。配達した人に感謝の気持ちを抱きつつ、印刷の匂いを確かめながら1ページずつページをめくる贅沢な時間。やはり、ネットニュースとは違うのだ。

新聞を家に配達してもらうということ自体が懐かし、この習慣は大切にしたいと、ふと思った。新聞は昔「瓦版」と呼ばれていた。時代劇を見ていると、口上入りで瓦

版を売る様子がよく登場する。今では号外がそれに近い。新聞を各家庭に配るシステムができたのは明治時代だという。当時は、大きな戦争もあり話題に事欠かなかったことだらう。

その頃、新聞配達人は女性にとってもモテたらしい。中には、ある高名な人の世話になっている女性と駆け落ちをした配達人もあったという。スキヤンダラスなニュースは今も昔も人々の好奇心をくすぐる格好の話題だ。明治の配達人として名



を馳せた「安藤政次郎」という人の存在を知った。大層な男前だったと聞き、早速ネットで調べてみた。「新聞売り小政」とも呼ばれたその人は、噂通りのイケメンで、まるで人気スターのブロマイドのような写真が残っているのが楽しい。さぞかし女性たちの気を引いたであろうその風貌は、現代のスターたちに勝るとも劣らない。何と安藤政次郎は、その後「動物園」を故郷である豊橋に作った。今では「豊橋総合動植物園」として残っているのだとか。なかなかの事業家でもあったのだ。